全国歴史民俗系博物館協議会 令和６年度年次集会　　2024/07/04

地域歴史文化継承の課題と可能性

国立歴史民俗博物館
天野 真志

はじめに

地域歴史文化とその継承
　・資料保存の展開：災害対策・日常的管理...
　・継承の担い手と方法：交流・連携・協働・共創...

天野真志・後藤真編『地域歴史文化継承ガイドブック』（文学通信、2022 年）
天野真志・吉村郊子編『REKIHAKU 特集　歴史をつなぐ』（国立歴史民俗博物館、2023 年）
天野真志・松下正和編『地域歴史文化のまもりかた』（文学通信、2024 年）
　・つなぐ：人・組織・地域とのつながり
　・まもる：方法・考え方
　　→歴史文化（資料）を通した対話の模索

1．歴史文化継承の経過

1．1．歴史文化をとりまく“危機”

・自然災害の多発化・激甚化～「大災害時代」
　阪神・淡路大震災（1995 年）･･･東日本大震災（2011 年）･･･能登半島地震（2024 年）
　　→「レスキュー」の展開：全国規模での対応を模索

名称	活動期間	事務局	構成団体	典拠
阪神・淡路大震災被災文化財等救援事業	1995年2月14日～4月27日	東京国立文化財研究所	全国美術館会議 上文化財科学研究会 日本文化財科学会 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会	1995年2月14日付「阪神・淡路大震災被災文化財等救援事業実施要項」
東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援事業	2011年4月1日～2013年3月31日	東京文化財研究所	国立文化財機構、国立美術館、国立科学博物館、 人間文化研究機構、国立国会図書館、 日本博物館協会、文化財保存修復学会、 全国大学博物館学講座協議会、 全国美術館会議、全国科学博物館協議会 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会、 日本文化財科学会、歴史資料ネットワーク、 宮城歴史資料保全ネットワーク	2011年4月15日付「東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会設置要項」
令和6年能登半島地震被災文化財等救援事業	2024年2月13日～	文化財防災センター	国立文化財機構、国立美術館、国立科学博物館、 人間文化研究機構、国立国会図書館、 国立公文書館、日本博物館協会、日本図書館協会、 全国科学博物館協議会、文化財保存修復学会、 日本考古学協会、日本文化財科学会、全国美術館会議、 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会、 全国大学博物館学講座協議会 宮城歴史資料保全ネットワーク、歴史資料ネットワーク、 西日本自然史系博物館ネットワーク、 全国歴史民俗系博物館協議会、 大学博物館等協議会、文化財保護・芸術研究助成財団、 文化財保存支援機構、日本民具学会、 九州・山口ミュージアム連携事業実行委員会、 国宝修理装潢師連盟、映画保存協会、日本民俗学会	2024年2月8日付「令和6年能登半島地震被災文化財等救援委員会設置要項」

・社会変容との対峙：価値観の変容～過去に対する関心の低下、認識の変化（否定）

ex.「旧弊打破」　明治維新期における過去の否定

開発にともなう過去の破壊・消失

過疎化・人口減少

→失われるもの・生み出されるもの

1．2．継承の諸相

「地域歴史資料」〔奥村 2014〕：地域住民、行政、専門家等による対話と実践

→地域社会における歴史文化（資料）をめぐる変容

・地域を主体とした価値観

→地域の成り立ち・歴史経過、人びとの営み･･･

専門家だけではなく、地域住民や行政等が相互に注視、

地域にとって歴史的・文化的なるモノを見出す取り組み

地域単位での取り組み～「資料ネット」

資料をとりまく地域的関係の構築

→大学・博物館・図書館・行政・地域住民・・・

2．資料保存の現況

2．1．“危機”への対応

「レスキュー」：資料を危機的な状態から救い出す

cf. *“「文化財レスキュー」とは、被災時の文化財救出活動のうち、主に動産文化財等を対象として、被災地から救出・輸送し、保管（一時的な保管を含む）し、必要な応急処置をするところまで”*〔建石 2023〕

◆応急処置：常温での一時保管が可能な状態に導くこと

・資料自体の急速な劣化を回避

・資料の周辺に汚損物質を飛散させない～環境・健康

2．2．“レスキュー”のその後

資料への注目：危機的状況下での捜索、社会観察による発見
　→資料として認知される存在の多様化
・「震災資料」、「コロナアーカイブ」：歴史的意義の提起
・資料的価値の変遷：「被災資料」として救われたモノ
　→資料的価値の持続性・展開を考える

3．歴史文化継承の未来

3．1．資料保存・継承の課題

地域を軸とした資料保存・継承の展開：災害対応から考える
◆長期化するレスキューへの対応
　　・対象資料の広がり～多様化・増大化
　　・激甚災害への対応～深刻化する博物館施設の被災
　　・「レスキュー」の到達点～現場作業の見通し
　→相互補完・連携：特定の組織や専門性を超えた活動
　　現場担当者や特定の専門家だけに委ねきれない状況が顕在化

3．2．多様な連携の展望

ネットワークの希求：広域連携の潮流、地域・分野を横断
・国立文化財機構「文化財防災センター」（2020～）：全国を網羅する防災体制の模索
・人間文化研究機構「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」（2017～）
　→歴史文化継承の可能性とその方法
　　・技術的展開：“資料保存”の多角的検討
　　災害時における対応
　　・保存・継承をめぐる考え方や社会的役割
　　研究・教育のなかで考える
　　多様な人びとと考える

おわりに

集会テーマ「記憶と記録をつなぐ―歴史継承を担う地域と博物館―」

・歴史継承の担い手・拠点：大学・博物館・図書館・文書館...
　　→「専門家」に限定されない交流・対話・実践
・歴史文化（資料）をとりまく専門家・専門知のあり方　ex.「資料ネット」活動
　“･･･時々の場面場面で専門家に限らず、市民を含むさまざまなアクターとの協働がつくられることに注目するならば、歴史資料の保全は、歴史資料にさまざまな関心やスキルに基づいて関わり合う新しいpublicをつくり出す働き（make the public）であるとも言える”

　　⇔パブリック・ヒストリー：”to the public” ,“ into the public”　〔市沢 2024〕

【参考文献】

相宗大督　「記憶から記録へ 大阪市立図書館における「思い出のこし」事業」(『LRG = ライブラリー・リソース・ガイド』31、2020 年)
奥村　弘　『大災害と歴史資料保存』(吉川弘文館、2012 年)
奥村弘編　『歴史文化を大災害から守る』(東京大学出版会、2014 年)
高妻洋成等編　『入門　大災害時代の文化財防災』(同成社、2023 年)
谷　拓馬　「川崎市市民ミュージアムのレスキュー状況 ： 歴史資料を中心に」(『アーキビスト』97、2022 年)
徳竹　剛　「地域資料の継承と歴史意識」(『行政社会論集』
原田和彦　「水損資料とその措置について ： 長野市立博物館の事例」(『文化財の虫菌害』80、2020 年)
日髙真吾　『災害と文化財』(千里文化財団、2015 年)
三村昌司　「地域歴史資料学の構築にむけて」(神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター編『「地域歴史遺産」の可能性』(岩田書院、2013 年)
持田　誠　「コロナ関係資料収集の意義と必要性」(『博物館研究』630、2020 年)
吉川圭太編　『阪神・淡路大震災を撮る』(神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター、2019 年)
吉川圭太　「阪神・淡路大震災の記録と記憶の継承に向けて」(『LINK』12、2020 年)
吉川圭太　「震災資料と震災展示」(『歴史評論』865、2022 年)
天野真志　『記憶が歴史資料になるとき』(蕃山房、2016 年)
天野真志　「地域歴史資料と災害対策」(『文化財保存修復学会会誌』60、2017 年)
天野真志　「資料保存をとりまくネットワーク」(『カレントアウェアネス』347、2021 年)
天野真志　「地域歴史文化の継承と「資料ネット」活動」(『歴史評論』855、2021 年)
天野真志・後藤　真編『地域歴史文化継承ガイドブック』(文学通信、2022 年)
天野真志・吉村郊子編『REKIHAKU 特集　歴史をつなぐ』(国立歴史民俗博物館、2023 年)
天野真志・松下正和編『地域歴史文化のまもりかた』(文学通信、2024 年)

全国歴史民俗系博物館協議会　20240704
令和６年度年次集会（第 10 回）　川崎市市民ミュージアム
学芸員　谷 拓馬

水損資料レスキュー
－川崎市市民ミュージアムの被災収蔵品－

■はじめに

・歴史分野の収蔵品：30,000 点弱が被災。そのほとんどが紙資料（古文書）
・緊急搬出・保管：収蔵庫からの搬出、外部保管庫と当館のコンテナでの一時冷凍
・古文書レスキュー開始までの準備期間
　→「真空凍結乾燥講習会」in 奈良文化財研究所[1]
　→「第１回古文書修復に向けてのワークショップ」（講師：天野真志氏）
・令和２（2020）年７月：古文書レスキュー（応急処置）開始
・令和５（2023）年９月：事務所移転に伴い収蔵品レスキュー活動を一旦休止
　⇒現在は市内の移転先で収蔵品レスキュー活動を再開
・フローの構築と安定…今日に至っても試行錯誤を繰り返しながら作業を継続
・当館で実施している水損資料レスキューの応急処置に関する具体的事例
　→古文書レスキューの作業を「選別・記録化・解体・洗浄」の工程順に紹介

■紙資料の応急処置

1．選別

　①冷凍保管庫で被災資料を一時冷凍
　②冷蔵保管庫に移動…1 週間ほどの時間をかけて解凍
　③資料群ごとに整理、状態や厚さ等によって自然・送風乾燥と真空凍結乾燥に分ける
★状態が悪い場合：一旦作業を止めて再冷凍し、改めて処置方法を検討
　→当初：スクウェルチ法[2]による脱水、皿立てを使って棚に並べ大型の扇風機で乾燥

---

[1] 主な内容：一部実習と含む講義（①水損文書類のレスキュー、②乾燥処置法、③真空凍結乾燥の原理、④クリーニング法）と作業（①冷凍資料の事前輸送、②解凍・再梱包・凍結、③真空凍結乾燥機への搬入、④真空凍結乾燥機からの取り出し、⑤乾燥状態の確認と検討）

[2] 濡れた本を水取り紙（新聞紙など）でくるみ、酸素バリア性のあるプラスチックの袋に入れ、脱気して袋を熱圧着する脱水方法。

→梱包の際に使用する新聞紙が付着、資料同士が固着…乾燥の方法を再検討

⇒テント式乾燥：版画の折り畳み式乾燥棚と除湿機を設置

⇒梱包材：不織布を使用

★中性紙封筒同士の分離が難しい場合：真空凍結乾燥機

→自然・送風乾燥：癒着部分の繊維同士が湿気で絡み合ったまま乾燥されやすい

→真空凍結乾燥：繊維の収縮が湿気のない環境で行われる

…自然乾燥に比べて分離が容易になるように見受けられる

・令和 3（2021）年：真空凍結乾燥機を設置

→帝京大学文化財研究所：機械の取扱いに関するレクチャー

⇒実際に処理していくにあたって方法を確立

・資料の厚さ：3cm 以下、3～5cm、5cm 以上の 3 種類に選別

→厚さをそろえて処理をすることで均等に乾燥

→3cm 以下の比較的薄めの資料を中心に処置…なるべく短期間で入れ替えて運用

→処置速度…点数・厚さ・大きさ・素材等によって異なる

⇒大きさや厚さを合わせることが重要

★共同研究や協力等による乾燥処理

・帝京大学文化財研究所（共同研究）

・神奈川県立生命の星・地球博物館（協力）

・奈良県立橿原考古学研究所：乾燥剤凍結乾燥法[3]の導入

…①膨大な真空凍結乾燥予定の紙資料、②処理期間の長さ

2. 記録化と解体

★記録化：作業番号を付与する作業[4]

①印刷したラベルと資料が収められている中性紙封筒を撮影

[3] 乾燥剤（シリカゲル）と共に密閉容器に入れ、低温環境下（氷点下）において凍結乾燥する方法。

[4] 作業番号は記録化作業日（例：2024/5/2）＋資料群番号（例：ア A）＋通し番号（例：0001）を組み合わせて付与（例：2024/5/2 ア A0001）。

②中性紙封筒に記載されている情報をエクセルに記録し、その後の作業進捗を把握
→同定：封筒情報を基に目録やデータベースを活用しながら収蔵品とデータを突合
⇒記録化した資料：Ａ～Ｄのランク付け（開披の難易度）

★解体：資料を１枚ずつ分離・撮影し、記録表に資料情報を記入

・中性紙封筒から資料が取り出された状態のものを開披
…選別作業の際に固着が激しく中性紙封筒に資料が入った状態も含む
・固着の厳しい部分：水ないし 50%のエタノール水溶液で少しずつ湿りを与える
→紙が弱くなるので留意する
…概して強固な固着を示すことから中性紙封筒の除去に手間取る
…本紙から剥がしやすい中性紙封筒も例外的にはある
・中性紙封筒と固着した本紙：開披に時間がかかる
→中性紙封筒から離れるほど開披しやすくなる
・本紙のかなりの部分が劣化している場合
→さらに破損する恐れがあるため開披を断念することもある
・破損が激しい場合：仮止めや水張り
→保管に耐えられるような状態にする
・明らかに被災の影響ではない変質や経年劣化・破損・虫害など
→状況に応じて仮止めを行う
・解体後：洗浄できるものとできないものに分ける
→できないもの：資料的価値や状態を見極めながら優先順位を付ける
⇒修復技術者への業務委託も検討

3．洗浄

★洗浄：紙資料を１枚ずつ水洗して乾燥させる作業

①水を張ったテンバコに発泡スチロールのボードを浮かべる
②濡れた状態の紙資料に筆などが直接触れないよう、ポリエステル製の不織布とネットに挟んで保護しながら、汚れや付着物を取り払う
③ネットごと水から上げ、吸水タオルで水気を取り、ネットを外し、エアストリーム法で乾燥

・非常に状態の悪い資料
　→解体作業時にレーヨン紙で挟み、スプレーを使って水を吹きかけてクリーニング
・洗浄後：一枚ずつ分離された紙資料の撮影…応急処置の完了

■応急処置後

①進行状況表に記録表の情報を入力
②資料を仮封筒に封入し、燻蒸による殺虫・殺カビを行ってから外部保管庫に搬出
　→被災資料の劣化：物理的（破損）、生物的（カビ）、科学的（錆）要因により進行
　→洗浄・燻蒸を施した紙資料にカビが発生する場合もある
　⇒定期的な経過観察が必要

■今後の課題

・資料から発生する臭気の問題
　→風乾処置もしくは真空凍結乾燥を施した後、臭気が感じられる紙資料
　→東京文化財研究所に揮発成分調査（臭気調査）を依頼
　⇒資料から発生している臭気の原因物質を分析、現在も調査中

■参考文献

・中尾真梨子、奥山誠義、西山要一 2012「水浸出土木製品における乾燥剤凍結乾燥法の基礎的研究(I)」『日本文化財科学会大会研究発表要旨集』第 29 巻 日本文化財科学会、奈良文化財研究所埋蔵文化財センター PP.292-293
・小野寺裕子・佐藤嘉則・谷村博美・佐野千絵・古田嶋智子・林美木子・木川りか 2013 「津波等で被災した文書等の救済法としてのスクウェルチ・ドライイング法の検討」『保存科学』第 51 号 国立文化財機構東京文化財研究所 PP.135-155
・篠原聰、川﨑一史、菊地悠介、佐藤美子、瀬戸優香、谷拓馬、吉井大門 2022「松前記念館の博物館実習－博物館との連携による博物館実習プログラムの構築－」『東海大学資格教育研究』第 1 号 東海大学教職資格センター PP.71-84
・拙稿 2022 「川崎市市民ミュージアムにおける被災収蔵品レスキュー活動について－歴史資料を中心に－」『神奈川県博物館協会会報』第 93 号 神奈川県博物館協会 PP.39-43

コロナ禍による地域の変化を記録する
～モノとコトバの収集から～

持田誠（浦幌町立博物館）

１　コロナ関係資料収集の目的

地域博物館には、国や自治体が公文書や町史などで書き記した「公式の」記録からは洩れてしまうような、市井の人々の「素の日常」をモノやコトバで記録する役割がある。コロナ禍による地域の変化を、教科書的な、権力に都合の良い記述ではなく、「そのとき実際になにが起きていたのか？」を冷静に振り返ろうとした際に役に立つような資料を残したくて、コロナ関係資料を収集している。

２　主な収集資料

（１）エフェメラ
コロナ禍によって中止を余儀なくされたイベントなどの告知文や貼り紙、マスクなどである。
（２）新型コロナウイルス感染拡大防止に対応したモノ
フェイスガードなどの対策用品。のぼり・旗。消毒用品など
（３）マスク
自作マスク、政府配付マスク、新型マスクなど
（４）文書
役場の管理職会議の報告、学校の記録、博物館の対応記録など
（５）コロナ禍における生活記録となるもの
テイクアウト関係の割引券、差別から身と守るためのステッカー、書き初め、七夕短冊など風俗史資料、学級通信など学校関係資料、神社、寺院、キリスト教会などの宗教や民間信仰関係資料など

３　収集１年目の特徴

突然やってきたコロナ禍に戸惑い、緊急につくられた手描きの張り紙やビラなどが多かった。マスクについては、当初、品薄のため、手作りの布マスクが、ありあわせの道具で作られる現象が目立った。やがて材料が揃ってくると、布マスクづくりが一種の流行となり、いろいろな加工を施したオリジナル作品が登場した。いっぽうで、「マスクを着用すること」が目的化してしまい、無用なトラブルも見られるようになった。政府配付布マスク（アベノマスク）や、給付金に関する資料も収集した。

４　収集２年目の特徴

2020 年後半から、「新生活様式」「おうち時間」などの様式化された生活形態が定着しはじめ、収集資料にも当初のような「非常事態感」のあふれる資料は少なくなった。代わって、経済活動などにコロナ時代を象徴するロゴマークや文言の入った資料が多くなった。長期化により、アルバイト先を失った大学生の貧困に

関する資料、店舗の閉店などの資料も見られるようになる。いっぽう、地域からの資料提供が格段と少なくなり、逆に収集行為自体が周知されたため、広域から資料が散発的に送られてくるようになっている。

５　３年目以降、現在

2023 年に新型コロナウイルス感染症が感染症法５類に移行すると、急速にコロナ禍における注意書きなどが廃棄されるようになり、資料収集の呼びかけを実施した。また、「マスクの着用は自己判断で」などの移行期特有の告知モノなどを採集した。神社祭礼などが通常どおり実施されるようになり、そうした変化がわかる資料を収集した。また、新聞記事スクラップ集など、コロナ禍を振り返る資料の寄贈が見られるようになった。

６　コロナ禍における地域信仰の動き

神社の祭礼や神輿、無形文化財の浦幌開拓獅子舞の中止といった、伝統行事の縮小が目立つ。これに関する資料も収集しているが、いっぽうで地域の若者と神社が協力して、この機会に動画で獅子舞や神楽を記録しようという動きがあり、デジタル資料を博物館にも提供してもらった。

また、葬儀や通夜の簡素化が進んで定着し、これはコロナ沈静後も戻らないと考えられていたため、地域の寺院から葬儀の映像記録の必要性を相談されたが、遺族の同意が必要なため、実現に至らなかった。しかし、コロナ５類以後、葬儀の形は以前に戻りつつある。この状況についても、記録の必要があると感じている。

日本のキリスト教会では、100 年前のスペイン風邪に際して、具体的な動きがみられなかったことが報告されていたことから、コロナ禍における取り組みにどのようなものがあるかを記録した資料を意識的に収集した。

コロナ禍の数年間中止していた集落の小さな祭礼や馬頭観音祭などは、自然消失が危惧されていた。これについては、コロナ禍に消滅したものは地域には見られなかったが、近隣自治体のなかにはコロナ以後、神社終いを進めている傾向がみられる。コロナ禍が直接的な原因となっているかの因果関係が不明だが、引き続き動向を注視している。

いっぽうで、アマビエやヨゲンノトリなど、本州府県の忘れられ欠けていた疫病に関する民間信仰が、コロナ禍を契機に眠りから覚めたケースが北海道でもみられた。事象の記録としてなるべくモノを集めるようにしていた。

７　デジタル対応の動き

コロナ時代に対応した新しい文化として、ラジオ体操をネットで中継したり、「仮想盆踊り」などデジタル機器とインターネットを活用した新しいイベントが、地方でも実施された。こうした動きを記録するため、デジタル動画を資料として収集した。

８　学校関係資料収集の実際

コロナ禍で学校が閉校していた期間中の、こどもたちの生活に関する資料は、当初は、校長会など教育委員会を通じての公式な呼びかけで収集を試みたが、協力が得られなかった。いっぽう、教員と個別にやりとりしていくなかで、2022 年 2 月下旬、先生方から大量の資料の持ち込みあり、以後、継続的に収集ができている。日頃からの地域との関係づくりと、積極的な資料収集の呼びかけや成果の広報（情報発信）の重要性をあらためて認識した。

９　声の収集

大型感染症の流行は、感染者への差別、感染者の多い地域在住者への差別などが起こりやすいといわれている。だが、こうした差別に関する資料の収集は、モノではなかなか難しいことを実感し、聞き取りを進めるようにしたが、思うようには収集できなかった。また、ワクチン接種やマスク着用に反対する人の声について、当初は収集対象としていなかったが、途中から関連団体へ申し入れて収集するように努めた。

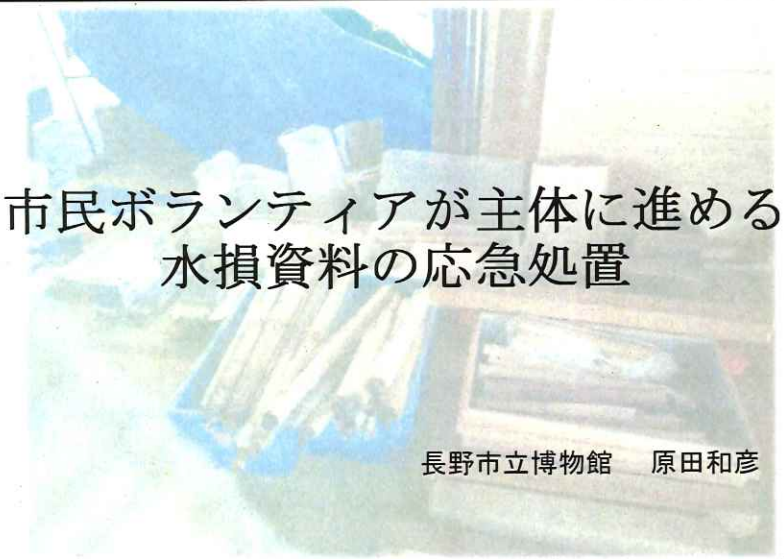
かつて日記や手紙の形で残されてきた、日常生活についての「思い」が、デジタル化で記録に残りにくくなっている。あえて声を集める、手記を募集するなどの形での収集が必要だが、聞き取りでは限界があり、常設展示室にミニコーナーを作って、「聞かせてください、あなたのコロナ時代」というアンケート形式での声収集に努めている。

10　学術分野との連携の動向

当館の収集方針として、将来の活用可能性を狭めないよう、分類をあえてせず、どのような資料も「コロナ関係資料」として一括して受け入れ、番号でのみ管理している。いっぽうで、学術的に活用可能な資料であることを示すためにも、各種調査研究への資料協力を、積極的にはかる段階だと感じている。印象として、博物館学やアーカイブズ学などを除くと、従来から博物館と関わりの深い歴史学や民俗学よりも、社会学の研究者からの問い合わせやアプローチが多い。今後は、博物館としても、収集資料の分析を主体的に実施して、資料が学術的に貢献しうるものであることを発信していく必要があるが、当館では社会学分野との連携はかつてほとんど実施された経験が無く、コロナ関係資料の収集を通じて新たな学術分野との連携が始まったことは良い経験であったと考えている。

11　コロナ関係アーカイブの構築で資料の総覧を

科学研究費補助金のプロジェクトで、全国のコロナ関係資料を網羅するアーカイブ構築が進められている。全国の資料を総覧することにより、どのような資料が収集され、何を記録し損ねているかの検証が必要である。



市民ボランティアが主体に進める水損資料の応急処置

長野市立博物館　原田和彦

今日のお話のあらすじ

1. 長野市立博物館における未指定文化財のレスキュー
   （1）栄村地震（2011年3月12日）
   （2）長野県北部地震（2014年11月22日）
   （3）松田氏館火災（2017年9月6日）
   （4）台風19号（2019年10月13日）
2. 罹災した地域の歴史的な特質
3. ご支援とご指導
4. 縮小化する活動と方針の転換　　ボランティア主体の活動へ
5. ボランティア活動を支える博物館学芸員

1．長野市立博物館における未指定文化財のレスキュー

（1）栄村地震（2011年3月12日）
　　地域資料保全有志の会（白水智さん）

（2）長野県北部地震（2014年11月22日）
　　被災建物資料救援ネットワーク

（3）松田氏館火災（2017年9月6日）
　　長野県が市町村の学芸員らに派遣を依頼
　　未指定文化財のレスキューについて議論となる

（4）台風19号（2019年10月13日）
　　長野市立博物館（信州資料ネット）が活動開始
　　松田氏館の教訓が生かされず

（1）（2）のまとめ
長野市立博物館としてできたこと　できなかったこと

長野市鬼無里の寺社資料の収集・保全・返却
　当初捨ててしまう予定だった寺宝の保全と返却

企画展示、講演会等の開催（あくまでも博物館事業として）
　白馬村・小谷村のものを含めて（博物館と罹災者個人との貸借）
　　ここに村は関与せず（次に述べること）

博物館としての限界　具体的には他村での活動
　何のため？　⇒　無理強い、干渉（職員がいること、いないこと）
　博物館活動として、担保されていない。
　県立博物館が関わらなくても全く問題ではない現実

（3）2017年9月6日
千曲市　松田氏館（長野県宝・千曲市所有）の焼失

千曲市が長野県に支援を依頼
長野県が文書で職員の派遣を依頼
県内市町村から職員が出向いてレスキュー
　ただし、その後の処理（水損史料）は手つかず？

長野県史料保存活用連絡協議会　会報　　2018年3月31日

ネットワーク長野県史料協

県史料協の今後―防災と資料救出への展望―

長野県史料保存活用連絡協議会　会長　征矢　正治

平成29年（2017）9月6日に発生した千曲市の武水別神社神官「松田館」火災では、県宝の「松田家住宅主屋」「斎館」など5棟が全焼しました。焼け跡の中から文化財などを救出しようと、長野県を通じて長野県史料保存活用連絡協議会の会員をはじめ長野県博物館協議会、市町村教育委員会の職員の皆さんを中心に、資料救出の手助けを頂きました。この清掃、9月25日の第1回資料救出作業には約30人、10月2日の第2回目の作業では実に60人もの人が集まってくれました。

県が資料救出のためにこれだけ広範囲に連絡を取ったのは初めてのことでした。北は飯山市、南は阿南町から参加者がありました。ほぼ全県といえる広いエリアです。遠くは東京から参加してくれた人もいました。皆様の歴史の継傳保存のために尽力しようという熱意に感動いたしました。

この火災を契機にして、長野県では文化財防災対策等検討委員会を設け、文化財の防火・防犯、防災対策等を検討しています。私はその委員長としてまとめ役を務めています。県史料協では第2回講習会で災害時文化財救援のネットワーク作りに向けた結ぶを進めておりますが、そうした議論も始まるながら、全県を網羅できる体制を考えていきたいと思います。

災害ではそれもできません。災害レベル、災害の内容によって対応は異なりますので、災害が起きることを前提にして、具体的に策を練っていきたいと思います。

先に地震で大きな被害を受けた栄村や白馬村には博物館がありません。博物館の機能だけでなく、公民の教育委員会や地域の研究会などが協に結びついて対応していきましょう。そのための組織化、体制作りが重要な課題です。

災害時の文化財救出のためには、どこにどのような文化財があるのかを整備している必要があります。古文書の場合、どのお宅にどれだけの古文書があるのかといった基礎的なデータ作成作業も必須でしょう。また、救出した文化財をどこに置くか、救出した後その文化財をどのようにするのか、いかに活用するのかなども課題です。県として、いざというとき救出した資料を一時的に保管する施設がどこにあるかを、事前にまとめておかねばなりません。課題は無数にあります。

これまで長野県は、災害時の文化財救出などについて取り組みが遅れていたはうたと思います。昭和24年（1949）1月26日の法隆寺金堂火災によって壁画に火をうる被害がでたことを契機にして、文化財保護法が制定されました。本県では松田館火災をきっかけにして文化財防災対

2．罹災した地域の歴史的な特質（長野市の「歴史のへそ」が罹災）

（1）**長野市長沼（千曲川堤防決壊地域）**
　①小林一茶の里
　②長沼城の城下町（武田信玄の築城から近世初頭・佐久間氏の城下）
　③信濃における初期浄土真宗の拠点となる地域
　④近世の宿場町
　⑤区有文書が豊富に残る地域
　⑥古い町並み

（2）**長野市豊野町**
　鎌倉時代「太田荘」の中心「金沢称名寺」との関係　　薩摩・島津家文書の世界

（3）**長野市松代町**
　①松代藩真田家の城下町
　②海津城前の尼飾城の城下町（東寺尾）
　③平安時代、鎌倉時代、室町時代と幅広い仏像をまつる寺の存在

（4）**長野市若穂**
　①宿場町
　②平安時代からの法灯を継ぐ寺院の存在

（5）**長野市篠ノ井塩崎**
　①旗本の知行所として栄えた地域
　②豊かな古文書の存在
　③寺院が多く存在する

（4）台風19号による被害と博物館の対応

令和元年10月13日　長野市長沼で千曲川堤防決壊、長野市内で越水、内氾濫が各所で起こる。

10月13日　長野市・避難所を開設。博物館職員も避難所にはりつき。

10月14日　多くの知人から、メールで被害状況についての問い合わせ。

10月15日　千曲川決壊箇所の情報をメールで各所、知人に配信。

10月15日　**東北大学・蛯名裕一氏**より防災マップ上に文化財の所在を示した図がメールで送られる。

10月15日　新潟県立歴史博物館が支援リストを公表する（**矢田俊文先生**からのメール）。

3．ご支援とご指導

（1）全国の資料ネットから、人的支援、物資の提供をいただいている。
（歴史資料ネットワーク、新潟歴史資料救済ネットワーク、信州資料ネットなど）

（2）日本博物館協会から全面的に支援いただいており、物資・人員の派遣を受ける。

（3）県内や隣県の大学（清泉女学院大学、松本大学、信州大学、上越教育大学、新潟大学）、首都圏の大学（中央大学、淑徳大学など）から、教員や学生の支援がある。

（4）国文学研究資料館（人間文化研究機構）の研究者が活動に参加している。

（5）歴史資料ネットワーク、新潟県立歴史博物館、国立歴史民俗博物館、JCP、京都芸術大学など、様々な専門機関から的確なご助言をいただいている。

4. 縮小化する活動と方針の転換（コロナ禍）

活動2か月後からの転換【現在行っていること】

①地元のボランテイアグループの育成
博物館ボランテイアとしての位置付けをする
「ながはくパートナー」 文化財保存グループ
応急処置活動終了後には、博物館の調査事業を担う

②全国各地からのボランティアの受け入れ
組織として受け入れる体制を、救出資料の位置づけ可能

③信州大学、清泉女学院大学との連携
救出資料の整理、人的な協力

2021年度の活動

和紙のワークショップ（大林先生）

大般若経の紙継ぎ
返却

掛軸の応急処置

掛軸600本の脱酸素パッキング

古文書の応急処置

2020年度の活動

被災資料のレスキュー

地元大学（信州大学、松本大学、清泉女学院大学）の協力

掛軸、屏風の解体

被災文書の洗浄、復元ワークショップ

状態の悪い資料の扱い（尾立先生　リモート）

南町奉行所資料の発見

2022年度の活動

★陸前高田市立博物館との共同展示の開催（日本博物館協会）
「今も続くレスキュー活動」展示の開催
「地域と専門知をつなぐ」シンポジウムの開催

★「博物館と市民による持続可能なふるさと再生プロジェクトWS」に参加

★「地域歴史文化フォーラム新潟　資料ネット・博物館・文書館と市民学生」に参加

JCP鈴木先生・小笠原先生による固着文書開披の実技講習

橿考研奥山先生・中尾先生による乾燥剤凍結乾燥法の指導

2023年

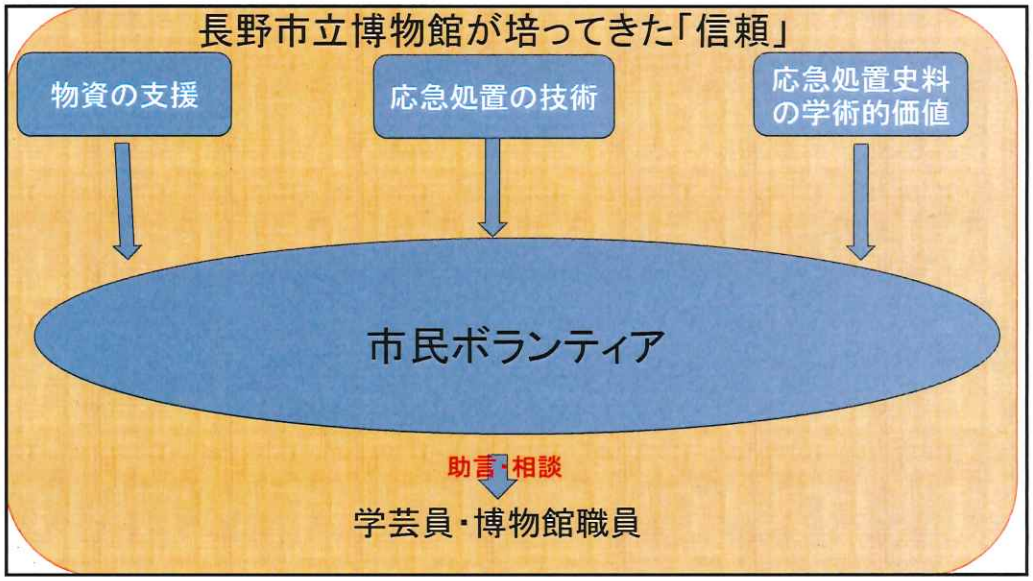
1. 活動報告
新潟大学矢田俊文編『救出された資料と文化財保存』
ボランテイアの執筆（奥村科研による出版）

2. 返却活動
応急処置の終わったものについては所有者に返却

3. 外部の専門家による指導
橿原考古学研究所奥山先生・中尾先生による「乾燥剤凍結乾燥法」を教わる。
国立歴史民俗博物館・天野准教授には何度もお越しいただいて、難しい処置について教示いただいた。

4. 救出した文化財の価値
中央大学・山崎圭先生が史料の目録作成
レスキュー史料を用いての論文報告
国文研の渡辺浩一先生が、江戸町奉行の史料を翻刻

5. 次世代への継承
博物館まつりなどでの、応急処置体験



5. ボランティア活動を支える学芸員（市民主体の博物館）
学芸員が市民を支える博物館（学芸員は生徒）

（1）資材の調達

（2）応急処置方法を専門家から学ぶ　そのパイプ役

（3）どんな史料を処置しているか専門家の助言

この当初の活動について

「救出・保全活動をその最初期の段階で軌道に乗せるという快挙を成している」としたうえで、
「この作業が今後数年は続くと思うとため息が出るが、実はそれこそが同館の最大の功績なのだ」とも評価いただいた。

（簗瀬大輔「台風一九号と歴史資救済活動のこれから」『武尊通信』第一六一号　二〇二〇年三月）

思い出のこしプロジェクト　地域への視座を育む図書館活動

大阪市立城東図書館　館長　相宗　大督
日本図書館協会認定司書　2038
まちライブラリー@ぐうたら文庫　主宰

「思い出のこし」とは

- 利用者（＝住民）が持つ「このまちに関する思い出」を図書館で収集し、関連する図書館資料などを補足・追加情報として加えて公開する事業

例
- いまはなくなった商店街のお店、映画館などの昔の風景
- 初めてCDを買った時のことなど
- 公園の愛称など、現在の風景

「思い出のこし」とは

- 利用者（＝住民）が持つ「このまちに関する思い出」を図書館で収集し、関連する図書館資料などを補足・追加情報として加えて公開する事業

- 補足・追加情報は図書館の地域資料等を活用

- **公開はCC　BY-SA 4.0 で提供**

- 2012年度、勤務先の大阪市立住吉図書館（地域図書館）で開始
- **2016年度から、大阪市立図書館全館での事業となる**

「思い出のこし」とは

- 収集・公開件数（令和4(2022)年6月現在）

  - **収集(受理)件数　964件**
  - **公開(HP)件数　284件**
    - **HPでの公開件数は令和6(2024)年4月　367件**

- https://www.oml.city.osaka.lg.jp/?page_id=1301

「思い出のこし」とは

- 公開に伴う市民協働の成果物

→有志の市民によるウェブアプリ
「大阪思い出のこしマップ」の作成・公開

https://armd-02.github.io/OsakaMemories

利用者と話をする

- 小さい頃に野球のボールで割ってしまった蔵
  成長してから地域の歴史にとって象徴ともいえる存在と知る

幼い頃にみた「まちの姿」
大人になってからみた「まちの姿」
それぞれの見え方の違い

利用者と話をする

- 自分が住んでいた地域からみて、通りから反対側に位置する地域は「ウラ」などとと呼んでいた。意識としては「ヨソ」であった。
  けど、反対側の地域にしてみたら、ウチの方が「ヨソ」やんね。
  モノの見え方はそれぞれで違う。
- そういうことを（思い出のこしでは）感じる。

自分が所属しているコミュニティへの意識
自分のコミュニティにある事物の見え方
他者のコミュニティにある事物の見え方

利用者から情報を集め・公開する

- 同じ事物を対象としていても、多様な視点からの情報が集まる
- 他者の視点を通じて、対象の事物に対して新たな視座を得られる
- 「多くの人々の参加」が必要

図書館の強み

- **来館者数**

  大阪市立城東図書館：1日約1000人
  利用者層：子どもから大人まで

- **数の多さ**

  大阪市：各行政区に1館（大阪市：24館）

  集客性、利用者層の幅の広さ、図書館そのものの数
  ML連携に有益では？